

研究発表会報告

ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』における空間の変容

松村明子

ラムゼイ夫人と息子のジェイムズが座わる窓辺の空間はヴィクトリア朝の価値観、文化的に敬愛される「母子像」を表しています。ラムゼイ夫人は瞬間を永遠と感ずることができ、人々の心を結びつける力をもつ女性で、リリー・ブリスコーにとって自己のヴィジョンを確立しようとする時、母的存在として大きな関わりを持ちます。『灯台へ』の第一部、「窓」におけるこの空間はリリーが描こうとする絵のキャンバスと重なっています。リリーは第三部の「灯台」において、通常なら美しい「母子像」として描かれる像をヴィクトリア朝という時代の文化的枠を壊し、線や三角などで表した抽象画という新しいフォームでひとりの女性を描きだします。つまりこの空間はリリーが新しい時代を切り開く女性として、芸術家として自己のヴィジョンを作り上げる空間へと変容します。イギリス帝国の政治的、社会的思想はこの作品の第一部に描かれている平和な生活の基盤を脅かし、第二部の第一次世界大戦をもたらします。そして大規模な破壊の後、新しい動きが起こり、1918年に女性投票権獲得とフェミニズムの新しい局面が出現します。第三部におけるリリーの新しいヴィジョン獲得もこうした歴史の一つと言えます。この論はリリーがどのように父権制の女性抑圧を拒否し、自己の抱える問題を解決することで画家としての独自のヴィジョンを確立していったかを検討しています。

ラムゼイ家に象徴される男性優位と女性の従属を意味する結婚は、独立した生き方を目指すリリーを脅かす父権制の絶対的価値観です。当時、産業革命で豊かになった中産階級は、男性は公領域へ、女性は私領域という性差に基づく役割分担を文化の中に広く浸透させました。そして父権制に都合のよい「家庭の天使」というゆがめられた女性像で家庭の美化がおこなわれ、イギリス帝国を築く男性を癒すために家庭の役割が強調されました。家庭の天使像は『灯台へ』の中で、ラムゼイ夫人の自己犠牲的献身と他人の目に映る自己評価への虚栄心に強く反映されています。ナルシストの夫への同情や、厳しい家計での8人の子育て、人々への絶えざる献身で命を擦り減らさざるを得ない「家庭の天使」の像です。ウルフは『自分自身の部屋』で、妻の役目は夫を二倍に映す鏡で、自己実現のための教育の権利、自分自身の部屋、経済力を持つことさえもできない不当さを指摘しています。

伝統的価値観という権威は、女に創作は不可能と差別する社会の中で自己のヴィジョンを獲得する時の大きな障害でした。リリーは、男性や子供との関係でのみ定義づけられる伝統的な女性像を拒否することで、archetypal motherとしてリリーの心に葛藤をおこす夫人を乗り越えます。そして線や三角などで光と影をあらわしたリリーの抽象画は時代の要請する絶対的な視点を否定し、多様な視点から捉えた母子像です。第三部でジェイムズが灯台に辿り着いた時、実際の姿と主観的に見ていた姿が異なるが、どちらも本当の灯台の姿だと認識します。このジェイムズの認識は、リリーが描く複数の目、多面性を基盤とした絵と重なっています。リリーは夫人が座りつづけた空間から外に出、新しい時代の到来を自己のヴィジョンとしてキャンバスの空間に描く時、ラムゼイ家の窓辺の空間は女性解放の空間へと変容します。

コメント

発表者はバージニアウルフが生きた時代考察を通して、フェミニズム的手法により、「灯台へ」の分析を行われました。社会的に強制された女性の意義、家庭内での立場について考察されておられ、「窓」における空間とリリーの絵を照らし合わせて捉えてらっしゃいます。ラムゼイ家が象徴する男尊女卑の夫婦関係はイギリス産業社会が社会発展のために女性の自己実現の機会を奪うことで成し遂げました。自分自身のヴィジョン、絵画という創作を通して、男尊女卑を生み出した伝統的価値観を壊そうとしたのがリリーです。リリーがラムゼイ夫人を母的存在として見ており、ラムゼイ夫人に矛盾する感情を持っている状態は、親子関係にも捉えることもできます。また発表者はウルフが描こうとした女性の問題を考察されておられます。例えば、「ナルシストの夫への同情」という発表者の文章は、精神的に弱い男性を、自分のエネルギーを注ぎ込んでまで、支えなければならないある種の女性の役割を表していると思います。また、「妻の役目は夫を二倍に映す鏡」といった発表者のウルフからの引用は、父権制の中では目をつぶりやすい女性の実情を客観的に表現しております。「家庭の天使」という概念は女性に大変重くのしかかり、女性の行動を制限していることがわかります。この概念を強調されたことが大変興味深いと思いました。ウルフが書いた非常に深みのある作品を読み通したこの発表により、我々の人生に対する洞察も深まりました。

ただ、こうしたウルフが描いた女性観の崩壊が父権制下での家庭が崩壊することへとつながるのではないかと思いました。ウルフは女性を犠牲にしてきた社会を壊そうとすること、女性の意識の変革は素晴らしいことだと伝えていていると思います。ただ変革後の影響、そして変革後の新たな価値観につい

での、ウルフの考えはリリーの絵によって表されているのではないかと思いますので、そういったものも研究していただき、さらなる分析に期待したいと思います。

(谷 紀子)

比較理論研究：最適性理論と使用依拠モデル

小原雄次郎

最適性理論 (Optimality Theory、以下 OT) と使用依拠モデル (Usage-based Models、以下 UbM) はともに個別言語の多様性の研究の対象として大きく扱っている。しかし両者の理論的前提が大きく異なるため本格的な比較考察は行われていない。今発表では、英語動詞の過去形の屈折に見られる規則変化と不規則変化の体系を用いることで、どちらの理論が個別言語の特性のより妥当な説明が可能か探ってみた。

OT と UbM の比較考察を行う前に、英語動詞の過去形の屈折パターンを簡単に記述的しておく必要がある。屈折のパターンは大きく不規則変化と規則変化に分けられる。規則変化は生産的な屈折で、動詞語幹に形態素 *-ed* が付加される弱変化の屈折である。形態素の発音は /d/ *loved*、/t/ *helped*、/ɪd/ *needed* という相補分布を見せるが、これは一般的な音韻現象である同化と母音挿入によって説明が可能である。また、この相補分布は英語全般に見られるため、形態素 *-ed* を特有の現象として分けて考察する必要もない。一方、不規則変化は非生産的な屈折パターンであり、これに属する動詞を共時的に分類すると、形態素を付加する弱変化型 (*spoil-spoilt*)、語幹母音を変化させる強変化型 (*come-came*)、両者の複合型 (*keep-kept*)、無変化型

(*cut-cut*)、異なる動詞が混在した補充法 (*go-went*) の5つになる。これらの型も古期英語では生産的であったと考えられるが、現在は規則変化の形態素 *-ed* へとドリフトする傾向が見られる。

このような特徴を持つ過去形の屈折パターンを、まず OT に拠って説明した。OT では普遍的な制約を序列化することで個別言語の文法を説明している。制約群を用いて規則変化の形態素 *-ed* の発音に見られる相補分布を説明するには、入力に STEM+/d/ を用意し、制約を VOICING、*COMPLEX(ID-PL)、Dep(V)、Max の順にランキングすることで可能である。しかし、不規則活用を扱おうとすると、説明は簡単ではない。形態素 *-ed* を語幹に加える代わりに別の出力 (例えば *went*) に変換するといった操作に音韻や統語上の制約が関わっていないため、現段階の OT では扱えないのである。ゆえに、このような情報はレキシコンに含めるしかない。次に UbM に拠って考察を行った。UbM ではスキーマ化の程度と定着の度合いをもとに規則変化も不規則変化も同一ネットワーク内で扱うことが可能である。これによってどちらのパターンも同じメカニズムで説明できる。

本発表では過去形の屈折パターンの考察対象にして、OT と UbM を比較検討した。OT が従来の生成理論と同じように不規則変化をレキシコンで処理しなければならないのに対して、UbM は規則変化と不規則変化を同一レベルで扱うことができる。そのことによって両パターンに働いている同一のメカニズムを説明することが可能である。しかし形態素 *-ed* の相補分布に関しては記述的にしか表示しえず、そこに働くメカニズムは UbM で明示的に示すことはできない。今後は理論の特性を考慮した上でモデルの精緻化を行わなければならない。

コメント

当時発表では英語の過去形の分布を生成するメカニズムを最適性理論と認知文法（使用依拠モデル）の両理論がどう扱っているかを比較検討し、その長短を論じている。発表者は認知文法より立場から最適性理論のモデルではレキシコン抜きでは不規則変化を説明しえないが使用依拠モデルは両者に働く同一のメカニズムを説明できるとする。発表者の主張を踏まえた上で本コメントでは、発表者とは異なった立場から当該の問題を見てみたい。

規則変化と不規則変化に同じメカニズムが働いているとする主張に対する反証として、パーキンソン病患者とハンチントン病患者を対象に行われた -ed 形を生成させる実験の結果がある。パーキンソン病の患者は不規則形動詞の使用に関しては問題がないにも関わらず、規則動詞の過去形を使用する場合に -ed 形の付け忘れが起こる。一方、ハンチントン病の患者には -ed を二回つけてしまう誤りを犯すという実験結果がでた。また、過去形形態素とは少々異なるが、複数形態素を用いた、幼児を対象とした語形成の実験でも、規則変化と不規則変化形の振る舞いの違いを表す結果が出ている。有名な実験だが、*mouse-eater* と *mice-eater* と *rats-eater* の組では幼児の殆どが *mice-eater* という語を生成したのに対して *rats-eater* という語形成を行った幼児がほとんどいないという実験結果もでている。

とはいえ、上記の反証も、発表そのものも扱っているのは屈折によるものだけである。話を派生にまで広げてみると、もう少し違った展開も見えてきそうな気がする。例えば、'fly' という動詞は意味によって違った活用をするようになる。従来、派生語あるいは転換に分類されてきたこうした動詞や、複合語を認知文法からの視点で捉えなおすと、新しい知見が生まれてきそうな気がする。英語のみにとどまらず、他の言語における形態変化を包括的に

説明しうるモデルの精密化に期待したい。

(藤原 崇)